

れ	赴	時	微	方	突		の	ま	れ	て		な	心	が	利	以			不
て	く	の	笑	で	然	「	前	る	な	い	番	れ	の	奏	他	外			思
い	兵	あ	み	す	話	本	の	歌	い	な	才	な	声	で	の	何			議
た	士	の	に	す	し	当	一	詞	な	ど	は	よ	は	た	宿	も			な
。	の	刺	は	よ	か	に	人	を	な	と	側	う	ど	あ	の	聞			解
	よ	う	、	う	け	い	の	頭	い	考	で	こ	の	の	こ	こ			答
	う	な	初	拒	ら	い	青	中	い	え	最	か	に	曲	え	こ			
	な	穏	め	絶	れ	曲	年	で	い	ら	後	切	に	に	て	な			
	や	やか	と	感	驚	で	に	再	る	れ	ま	な	、	乗	。	い			
	さ	かさ	と	は	い	す	最	生	の	な	で	、	、	つ	。	。			
	と	秘	秘	な	の	ね	大	し	は	い	そ	、	、	聞	。	。			
	め	めた	め	く	は	。	の	な	。	っ	れ	、	、	こ	。	。			
	覚	悟	め	、	は		賛	が	。	て	い	、	、	え	。				
	悟	が	、	戦	、		辞	ら		い	、	。	。	て					
	が	表	戦	地	振		を	、		か	。			く					
	表		地	へ	り		送	。		も				利					
			と		向		る			し				他					
					き		。			し				の					

番	の	して	「	だ	う	い	は	座	り		思	の	る	う	今	「	「	く	
才	も	て	え	と	行	い	は	つ	ま		え	よ	の	に	自	邪	邪	れ	
は	女	最	え	い	動	と	そ	っ	し		る	う	だ	、	分	魔	魔	ば	
そ	将	後	、	う	に	う	う	て	た		自	に	ろ	利	が	を	を	よ	
う	さ	に	先	こ	他	意	が	い	た		分	に	う	他	こ	し	し	か	
言	ん	話	ほ	と	の	図	「	た	場		が	に	か	も	れ	所	か	っ	
い	で	を	ど	も	行	だ	こ	。	所		不	の	。	こ	か	か	ら	た	
な	す	す	女	伝	動	と	こ		か		思	短	こ	れ	を	少	の		
が	。	る	将	わ	を	い	こ		し		議	期	こ	ま	し	し	に		
ら		機	さ	っ	足	う	こ		横		だ	間	ま	で	に	ず	な		
利		会	に	て	し	こ	こ		に		っ	で	の	の	い	れ	な		
他		を	伺	い	た	も	に		座		た	も	何	言	返	な	ら		
が		作	い	ま	。	、	座		っ		な	、	か	動	し	声	を		
空		っ	ま	し		伝	っ		て		が	懐	し	を	て	か	け		
け		て	し			え	て		く		か	か	く	ね	。	け	て		
て		く	。			る	く		だ		し	く	い	。		て	け		
く		だ	こ			と	だ		さ		て	出	い						
れ		っ	う			い	さ		っ		い	な	い						
た		た	こ			い	い		な		な	い	な						
場		た	う			い	い		な		い	い	い						

「結構ヤバかったですよ。」と利他は声に出し	微笑む利他に番才は「申し訳ない。」と謝罪し	て思いましたけど。」	を感じてます。そりゃ初めはなんだこの人っ	「番才さんにも、おれは女将さんと同じもの	利他は番才を見ることなく語った。	「そんなことは、ないですよ。」	だった。	事実だと思いい知らされているからこそその笑い	自分を悲観的に見ているからだけではなく、	番才はそう言って自嘲気味に笑った。それは	力の無さを思い知らされる方です。」	自分でも受け止めてくれるような・自分の	「その意見にはわたしも賛同します。どんな	尊敬します。」	きつと色んな経験をされてるんだろうなって	と自分がとんでもなくガキに感じちゃって、	というか、不思議な方ですよね。一緒にいる	「そうですね。あの方は本当に凄い	所に腰を下ろす。
-----------------------	-----------------------	------------	----------------------	----------------------	------------------	-----------------	------	------------------------	----------------------	----------------------	-------------------	---------------------	----------------------	---------	----------------------	----------------------	----------------------	------------------	----------

そ れ ま で は 歌 を 歌 っ た り し て た ん で す け ど 。	っ て ま し た 。大 切 な 友 達 を 亡 く し て す ぐ に 。	「 ・ ・ お れ は こ こ に 来 る 前 、 喋 れ な く な	が 同 時 に 全 身 に 広 が っ て い く 。	ら れ て い た だ け の よ う な 、 む ず 痒 さ と 齒 痒 さ	だ こ の ま ま 放 っ て は お け な い と い う 思 い に 操	他 に 関 わ っ て き た の だ ろ う か と 自 問 す る 。た	番 才 は 自 分 が そ こ ま で 崇 高 な 何 か に 従 っ て 利	よ っ て 。」	重 し て く れ て 、 そ れ を 実 現 す る た め に 手 伝 う	て く れ て ま し た 。お れ の 意 志 と こ れ ま で を 尊	れ に 、 “ お 前 は ど う し た い ん だ ？ ” っ て 言 っ	い た ん だ と 思 い ま す 。そ ん な 時 に お 二 人 は お	向 に 向 か え る ん じ ゃ な い か っ て 思 っ て 甘 え て	に 誰 か が 手 を 差 し 伸 べ て く れ て 、 楽 に 良 い 方	を 過 ご し て ま し た 。で も ど こ か で そ ん な お れ	か ら っ て 自 分 で 全 て を 背 負 お う と 決 め て 日 々	番 才 さ ん も 同 じ で し た 。お れ は 自 分 の こ と だ	「 そ れ で も 、 根 元 に あ る も の は 女 将 さ ん も	て 笑 っ た 。
--	--	--	--	--	--	--	--	-------------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	-----------------------

ここに止まったところで何も解決しないこと	るんですよ？」	てない。それに、それ以上の苦悩が待っている	ですか？戻ったところで、声が出る保証はない	礼を承知で聞きます。なぜ戻ろうと思えたんですか？	さんにも話してあると言われているので、失	「すいませんが、女将さんからも既に利他	て止まらなかった。	議でならなかったが、それ以上の思いが溢れ	利他の口から雫の名前が出てきたことが不思議	思えました。」	や雫さんのおかげで、もう一度歌を歌おうと思	でも、女将さんや番才さん、それに名取さん	歌以外で償いをしなければと考えてたんです	んじゃないかと思ってきました。だからこそ、	「そうですね。おれはもう二度と声が出ない	取さんが仰ってます。それで。」	ら恐らくそうなのではないかと女将さんや名	「・・・いえ。ただ、利他さんの言動などか	聞いてたりしますか？」
----------------------	---------	-----------------------	-----------------------	--------------------------	----------------------	---------------------	-----------	----------------------	-----------------------	---------	-----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------	----------------------	----------------------	-------------

も、戻らないという決断はその時点で死を受	け入れるという選択をしたことと同じことに	なることはわかっていた。それでも番才は、	目の前の青年が大きな大きな一歩を踏み出そ	うと思えた何かを知りたかった。	「確かに、おれはこうなることをどこかで	わかった上であの水を飲み続けてきました。	死ぬことで償いになるのなら、それも甘んじ	て受け入れよう」と。	利他は努めて明るい音色を出してくれている	みたいだ。	「当然怖いです。戻ったところで何も解決	しなくて。ここだから、不自由なく話せるか	らこそ湧き上がってきているものかもしれない	い。それに、今度こそ躊躇いなく・・・。」	続く言葉を想像して番才は胸を押さえる。こ	この宿泊者たちのこれまでを思うと、理由も	分からずこの場にいる自分がどうしようもな	く場違いで、疎外感すら感じられる。	「けど今はそれ以上にここで見つけた“生
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------	---------------------	----------------------	----------------------	------------	----------------------	-------	---------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------------	---------------------

番	利	す	て		れ	中	ら	ら	ら	生	に	利	す	る	戦	は	目	て	き
才	他	。	、	「	を	に	め	れ	れ	と	残	他	。	こ	っ	こ	標	く	て
は	の		何	今	何	大	つ	な	な	共	る	の	。	と	て	ん	、	れ	い
返	真		も	日	度	切	こ	か	か	に	。	言		共	、	そ	それ	て	く
事	っ		で	是	も	に	し	っ	っ	探	。	っ		に	、	う	に	る	い
を	直		き	非	何	し	続	た	た	し	命	た		い	、	望	ん	味	。
す	ぐ		な	見	度	ま	け	物	ち	始	を	は		。	ち	み	で	。	。
。	な		い	に	も	っ	い	た	は	め	授	死		。	や	を	す	。	。
	眼		で	来	読	て	す	ち	ぬ	る	か	ま		。	い	叶	。	。	。
	差		す	て	み	あ	け	は	ま	。	つ	で		。	け	え	。	。	。
	し		け	く	返	る	ど	は	そ	。	た	。		。	な	る	。	。	。
	を		ど	だ	し	。	お	。	の	。	全			。	い	た	。	。	。
	し		お	さ	。	。	礼	。	設	。	て			。	け	い	。	。	。
	っ		礼	い	。	。	が	。	問	。	。			。	な	。	。	。	。
	か		言	。	。	。	言	。	と	。	。			。	い	。	。	。	。
	り		いた	。	。	。	う	。	、	。				。	い	。	。	。	。
	と		たい	。	。	。	と	。	見	。				。	を	。	。	。	。
	見		い	。	。	。	。	。	つ	。				。	届	。	。	。	。
	つ		。	。	。	。	。	。	け	。				。	け	。	。	。	。
	め		。	。	。	。	。	。	。	。				。	。	。	。	。	。

「わかりました。わたしこそ利他さんに会えて本当に良かったと思います。思い返すと謝らなければならぬことだらけですが、この結果を利他さんが選んだことが全てです。」

「ありがとうございます。感謝します。」

差し出してきた利他の手を番才は握り返した。それをさらにもう片方の手で利他は包み、そのまま最後の会話は幕を閉じていった。

その後番才は自室に戻り夜を待った。ベランダに出ていつもと変わらぬ色合いで注ぐ光を浴びてしばらく森を眺めていた。やがて美祿が部屋を訪ね、次に雷鼠が。三人であれやこれやと話している、目を擦りながら雫もベランダの日の当たる場所まで出てきた。雫に利他のことを話すかどうかを考えていたが、どうやら自分以外の三人もそれぞれに利他のことを知っており、それぞれがそれぞれなりに気にかけていたみたいだった。

「利他さん今日帰っちゃうんだって！それを番才さんに言おうと思っただけだ。」

が	「			う	声	た	と	と	つ		そ	書	笑		た	美	さ	「	雷
っ	ゴ			一	に	。頭	で	で	心		れ	い	み		。	禄	ん	わ	鼠
て	オ			度	耳	に木	何	何	の		を	た	を			は	既	た	は
い	ウ			は	を傾	に木	か	か	中		否	生	浮			生	に	し	は
く	ツ			っ	けな	に木	が	が	の		定	き	か			き	ご	も	生
。	!			き	なが	に木	進	進	苦		さ	る	べ			る	存	同	き
番	」			り	がら	に木	展	展	悩		れ	意	顔			意	知	じ	る
才	と			と	、番	に木	す	す	と		た	味	を			味	だ	用	意
た	い			と	才は	に木	る	る	葛		の	に	伏			を	件	件	味
ち	う			脳	は自	に木	の	の	藤		ら	せ	。			取	だ	だ	を
は	風			裏	分の	に木	な	な	。		に	た	。			り	っ	っ	知
夜	が			に	の解	に木	ら	ら	。		寄	て	こ			上	た	た	っ
空	下			刻	解答	に木	、	、	。		り	き	の			げ	ん	っ	て
に	から			み	をも	に木	自	自	。		添	て	子			ら	で	っ	て
幻	上			込		に木	分	分	。		う	き	は			れ	す	っ	も
想	に			んだ		に木	の	の	。		こ	て	、			て	け	っ	実
的	舞			。		に木	解	解	。		そ	、	他			生	ど	っ	感
に	い					に木	答	答	。		し	そ	人			き	、	っ	で
輝	上					に木	を	を	。		て	し	の			て	み	っ	き
く						に木	も	も	。		て	て	の			き	な	っ	な
						に木			。		。	。	。			き		。	い

光の道を見上げていた。

〜
続
く
〜